平成十六年初登城と初参り

—— 中世山城、戦の備えと
祭りに視る　政（まつりごと）　——

牛の皮城跡遠景

平成16年2月城郭部会バス例会資料

担当講師　坂本　敏夫・木下和司

バス例会予定行程割

集合時刻	８時１５分	……トイレを済まして乗車
出発時間	８時３０分	
	↓	
牛の皮城麓着	９時３０分	…… 登頂開始
	↓	徒歩
牛の皮下城着	９時５５分	…… 途中福成寺五輪塔群見学
牛の皮下城発	１０時２０分	
	↓	…… 途中見学しながら登坂
牛の皮本城着	１０時４５分	
牛の皮本城下山	１１時１５分	
	↓	徒歩
牛の皮城麓発	１１時４５分	
	↓	途中トイレ休憩１０分
御調八幡神社着	１２時１０分	
	昼食休憩をふくむ、トイレ有り	
〃 〃 発	１３時２５分	
	↓	……徒歩時間をふくむ
本郷平廃寺跡着	１３時４０分	
本郷平廃寺跡発	１４時００分	
	↓	……徒歩時間をふくむ
久本山照源寺着	１４時２０分	
久本山照源寺発	１４時４０分	
	↓	徒歩
本照寺と五輪塔群着	１４時５５分	
〃 〃 発	１５時１５分	
	↓	
圓鍔勝三記念館着	１５時２５分	…… トイレ有り
〃 〃 発	１６時２５分	
	↓	
福山駅北口着	１７時３０分	

御調の概略

今回のバス例会は御調町と三原市八幡地区を取り上げましたこの地域は、現在では三原市と御調町に行政区域が分かれていますが、元は一つの行政単位御調郡域です。

御調郡は古代備後国十四郡の一つで初見は、平城京出土木簡に「備後國御調郡諫山里」とあるのが始めです。御調郡は「水調・三豆木・三調」と記した文書も散見でき現御調町は郡域の北部に位置し芦田川の支流御調川が町の中心部を東流し、御調川に沿うように古代山陽道が通り又、南北には国道一八四号線が通っており、町の中心部「市」周辺は古代からの交通の要地であり、中世には御調町北隣の甲山地域に立庄されていた大田庄と大田庄倉敷地尾道との間に位置し中間の重要地でもあった。

今の御調町は福祉先進モデルの町として全国的に注目されていますが、古代から近世に至る歴史的な文化遺産も数多く伝わっている町です。

今回は御調町と三原市八幡地区の中世に視点を向け「牛の皮城跡・照源寺重文木造涅槃像・石清水八幡御調別宮」の三ヶ所を中心に他に二ヶ所を合わせて計五ヶ所の探訪と圓鍔勝三記念館の見学を計画しました。

この地域の中世は大略、御調南条庄（河南庄）、御調北条庄（河北庄）の各荘園と石清水八幡御調別宮（御調八幡神社）領（八幡庄）に分かれていたようです。

この他に、神村庄・垣田荘が設けられていたとの説もありますが定かではありません。

御調南条庄（河南庄とも）は、文書に拠ると御調川南岸以南に一一六〇年代には立庄しており、西は石清水八幡御調別宮領に接していたようです。仁安三年（一一六八）に大田庄の倉敷地尾道村は南条庄側に含まれると押取行為に及び遙任国司藤原雅隆より留守所宛に南条庄の押妨を停止するよう命じられている。

御調北条庄（河北庄とも）は御調川北岸に立庄し西は杭庄と接していたようです。

御調北条庄に付いては「吾妻鏡」元久元年（一二〇四）二月二十二日条に次のような文書が記載されている。「廿二日　丙辰　備後國御調本北條停止地頭四方田左近将監沙汰被付国衙云云　遠州下知」とあり、北条時政が下知した事が記述され、地頭が置かれていたことが窺える。

鎌倉期に地頭が置かれた御調郡内二ヶ所の一つが御調町内であった事が覗える。

（注）御調南条・北条庄は荘園として立庄されていた確証は無く、国衙領の状態あった可能性も考えられる。

神村庄は、石清水八幡宮宝塔院領荘園であり、御調町神地域に比定されると言う説があるが。この荘園は承安元年（一一七一）十二月十二日付け官宣旨案に神村荘の名が視え承安元年以前に立庄されていた事が推定でき、養和元年（一一八一）と建久元年（一一九〇）の二度にわたり後白河院庁下文が出されており、文明十年（一四七八）六月十三日付け文書によ

ると太田庄伊尾の下見高綱の請地となり、明徳四年（一三九三）四月七日備後國御料所注文によると守護料所となっていたようです。

この様に神村庄については種々の文書が伝わっている様ですが所在地に付いては福山市神村町に比定する説もあり定かではない。

垣田荘については、御調町丸門田付近に垣内の地名があり垣田荘の説もあるが明確な確証を欠く。

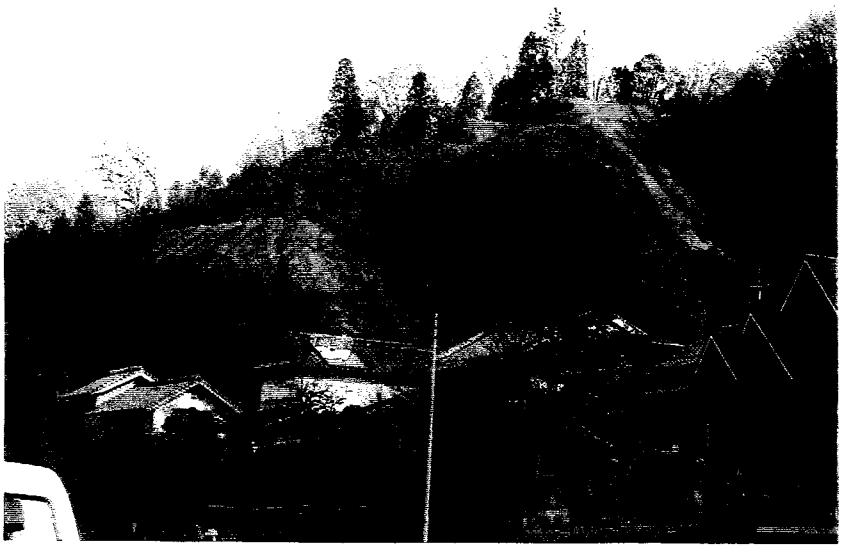
中世後期には御調町地域も他地域と同じく荘園制支配形態が崩壊し各地に弱小豪族が台頭してくる。中でも「森光・池上・上里・末近」等の地区豪族が現れるが、何れも国人領主とは成り経なかった様である。

戦国末期には御調地域は小早川氏の勢力下に組み込まれたようであり、この様な地域の状況下で「池上・末近」の二氏は小早川氏の被官人となり近世まで命脈を保ち続け、特に末近氏は御調町植野より久井町羽倉に移封されて後、小早川隆景の命により天正十年備中高松城に軍監として派遣され毛利軍と秀吉軍との和議条件により城主清水宗治と共に割腹して果てている。

他に、戦国期に北から三吉氏が南下し森光・池上・上里氏等が被官人と為り、仲でも池上氏は三吉氏の家臣として御調の市に入部して活躍したとの説も伝わるが明確性を欠く。

この地域が毛利・小早川氏の勢力下になる以前は大内氏の勢力下に組み込まれていたものと考える。三吉氏が南下したと考えるより大内氏の勢力下での生き様と考える。

牛の皮城跡北郭群遠景



牛の皮城址

所在地　御調郡御調町大字大町字二の丸
標高　二百三十三m、　比高　百五十m

御調川と古代山陽道を望む御調町大町の谷筋山頂に南郭群、北に延びる尾根先端部に北郭群を配置した戦国末期の様子を色濃く残す山城である。城の麓近くには「二日市・古市」等の地名が伝わり城の立地との関わりを覗わせる地名である。

城主名としては、森光新四郎景近・同下総守近宗・同左衛門元清、又、川田太良左衛門久勝が文禄年中まで在城と伝わるが城主の確証はない。次に記す「萩藩閥悦録・安西軍策・芸藩通志・神田神社」等に伝わる記述等から実在していた武将と考えられる。

林平八家文書によると毛利輝元宛行状が文禄三年（一五九四）に発給されそれによると御調郡守光氏の先給地五九三・四石が林志摩守元善に宛行われている。

萩藩閥閲録林平八家文書より

備後国神怒郡上下村四百拾七石貳斗・同郡矢野村貳百廿四石・同郡計増矢多田村百九拾九石・同郡伊永村百三拾八石八斗・同郡小塚村百四拾五石、同国神石郡木津和村貳百六拾貳石・同郡田頭村貳百拾石、同国世良郡小谷幡立原貳拾九石八斗、同国御調郡守光先給五百九拾参石四斗、藝州安北郡伴村・阿土村之内参拾六石六斗、防州都濃郡矢地・長穂参拾五石、并而貳千貳百九拾石余地之事所令裁許也、

全領知、不可有相違之状如件

文禄三年九月三日　　輝元公御判

林志摩守（元善）とのへ

（注）守光の守は森に通じると考える。

御調町市の「神田神社」が過っての御調北条庄の氏神であったとも云われ、棟札写に由ると牛の皮城主森光景近が本願となり元亀元年（一五七〇）神殿の修復が行われたと伝わり、又、景近は刀剣を奉納し年々初穂料五百文を寄進したと伝わる。

牛の皮城址は、中国横断道尾道松江線建設工事に伴い一部破壊される事となり、広島県教育委員会による発掘調査が行われた結果、北郭群の防御施設の構築状態が立体的な姿で鮮明となりました。

現在まで破壊されないで残った山城が発掘調査され、構築された時代の姿に近い形を現し、発掘された城跡を見学でき、且つ発掘された北郭群に続く未発掘の南郭群と比較探訪できる機会は稀であると考えます。

出土遺物は土師質土器片・備前焼甕片・輸入磁器片・土錘・小札・鉄釘・銅製留め金等が出土しています。

――遺跡見学会資料より――

発掘現場の現況からは建物跡の痕跡は・掘っ立て柱式建物跡・礎石式建物跡等どちらの痕跡も認められない。

城の主要な郭配置は北郭群と南郭群に分かれており、南郭群は標高二百三十m・比高百五十mの最高所に南北約三

十二m東西約三十mの主郭を設け、主格下北に一段の郭を設け、主郭東側直下に九本の畝上竪堀を設けている。主格下南側にも大小六本の畝上竪堀を設け、西側には連郭状に四段の郭を設け、三段目郭が北側に廻り込んだ郭端に井戸跡が残る。井戸跡に続いて一段高い井戸郭が設けられている。五段目郭先端部には二条の堀切と竪堀を設けている。南東側尾根上には幅約十～十三m長さ約八十mに渡り隣接の山裾まで続く削平された平坦地があり両端を切岸状に切られている。城下集落民の避難場所か。

北郭群は標高百七十m・比高九十mの尾根筋北端に設けられており、主要な構えは五段に分けた連郭式郭配置と最高所郭に設けられた櫓台と思える一段高い削平地、城西側は全体が垂直に近い形の切岸が設けられており、切岸の中間には一筋の竪堀が設けられている。

三段目の郭と四段目の郭の中間に郭を削平して神社が祀られており三段目の郭は当初は現状よりも広かったものと考える。

最高所の櫓台南側下には南郭群へと続く尾根上に二筋の堀切が設けられており、堀切に続く南郭群への尾根上に、一段高い郭状の高まりが見られる。

北側郭先端部には十四筋もの畝状竪堀が設けられており、発掘調査によって畝状竪堀が構築時に近い状態で姿を現しており、畝状竪堀が城の防御を目的とした構築物の中でも極めて防御機能が高い事がよく解る。

北郭群の東側谷筋には変形Y字型竪堀とY字型竪堀に挟まれるように二筋の竪堀、それに続く五筋の竪堀が設けられ、続いて北郭群南側下部の堀切から続く二筋の竪堀が設けられている。北郭群東側の谷筋奥の郭には井戸跡があり井戸郭の役を成しており井戸郭の下部にも郭状の削平地が在る。谷筋東側小尾根上には小さめの二段の郭が設けられ、谷筋の防御機能を高めている。

谷筋には城への登板路があり登坂路麓辺りの集落部が周辺よりも階段状に高い状態を呈している。この辺りに居館が存在していたかも、居館を設けて居たならば城大手筋の防御機能は高かったと思える。

今まで各地で視た戦国期山城跡にも同じように谷筋を大手筋として使用し、大手筋に居館や家臣の屋敷を構えて防御機能を高める工夫を凝らした例は多々ありこの城跡もそれらの城跡の有り様と同じように見える。

南郭群と北郭群とは構築時期に時代差が有るのではないだろうか、最初に北郭群が初期の山城として築かれ、その後戦国末期に南郭群が築かれ同時に北郭群も改築され、現状の様な一体的な牛の皮城址が構築されたものと考える。現在の城跡の略側図・現地調査・発掘調査結果等から考察して、戦国最末期に現在の形に構築されたものと考える。

城跡の現況を下見しての感想は、当時の城地周辺地域の時代状況を推測して城の規模、城地の選定の妙、縄張りの妙、防御構築物の配置等、極めて防御機能の優れた山城であると考える。

また、遺構の残存状態も極めて良く保たれており、高速道建設により一部とはいえ破壊される事は残念である。

牛の皮城下釈迦堂近景

牛の皮城下釈迦堂　木造釈迦如来像

牛の皮城の西麓には地元の人々が釈迦如来を祀る釈迦堂がある。この釈迦如来は後世に着色が行われたために、文化財指定を受けていないが、鎌倉時代中期頃の造像と思われる秀作である。お顔を見るとふっくらとした優しい面立ちであり、鎌倉時代の仏師の主流・慶派の面立ちとは明らかに一線を画している。慶派とは、東大寺の再建に活躍し、仁王門の金剛力士像を造像したことで有名な運慶・快慶の属する仏師集団である。

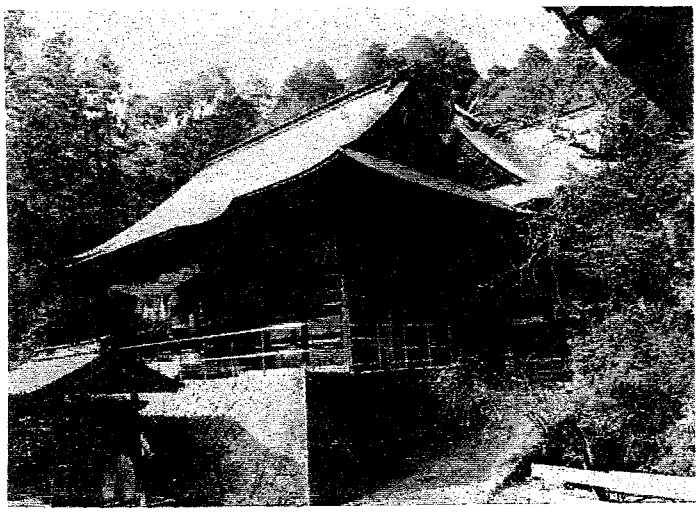
平安時代末頃から京都には師弟関係に基づく、仏師集団が形成されていた。鎌倉時代に其の存在が知られる仏師集団は、前述の慶派、京都三十三間堂の千躰千手観音で知られる院派・円派の三つである。私見であるが、この釈迦像は院派の手になるものではないかと思われる。その柔和な表情は院派の作風に近いと思う。

この釈迦如来像は元はどこか別の場所に在った物が時代を経て現在地に移され、地元の人々によって祀られている。つまり御調郡には鎌倉時代に京都と繋がりがあった事が推定される。其の繋がりとは、現在は三原市に属する八幡庄ではなかったかと思われる。八幡庄は石清水八幡宮の所領であり、御調別宮とも呼ばれる。御調別宮の中心地には御調八幡宮があり、此処にも平安時代及び鎌倉時代の仏教美術品が収蔵それている。つまり、元々は八幡庄内にあった寺院に祀られていた仏像が後世の戦乱で焼け出されて、最終現在地に移されたのではないだろうか。歴史の荒

波の中で釈迦如来像がどのような運命を辿ったかを想像することも、仏像を訪ねることの楽しみの一つと思う。

なお、釈迦堂横に牛の皮城跡周辺より発掘された五輪塔・宝篋印塔等の残欠が集め祀られており牛の皮城城主の墓とも言い伝えられている。

記　木下和司



御調八幡宮

御調八幡宮（御調別宮・八幡神社）

所在地　三原市八幡町宮内二一

通称　八幡のはちまんさん

祭神　誉田別尊、足仲津彦命、息長足姫命、（相殿神）武内宿禰命、田心姫命、市杵島姫命、湍津姫命

例祭　四月第二日曜日（旧例祭日四月九日）十一月第二日曜日（旧例祭日十月九日）

本殿　五間社入母屋造、千鳥破風、唐破風付、銅板葺（間口八間、奥行五間半）

付属社殿、幣殿（二・八三坪）、拝殿（二六坪）、神楽殿（二四坪）、宝蔵（四坪）、手水舎（一坪）、社務所（四〇坪）、神門（一〇・五坪）、鳥居一基

境内地　一五、四七七坪

境外地　二坪

摂末社　和気神社（和気清麻呂公、和気広虫公ほか一柱）
厳島神社（市杵島姫命）、地主神社（地主大権現）、若宮神社（仁徳天皇）、春日神社（天児屋根命）、稲荷神社（宇賀御魂大神）、住吉神社（表筒男命ほか二柱）、祇園神社（須佐之男命）、気比神社（伊奢沙別命）、彰徳神社（日清戦争以後の戦没者二百六柱）

宝物　木造狛犬一対・経板木五枚（以上重要文化財）、紺紙金泥大般若経一巻・紙本墨書出三蔵記集録・銅戈一口・行道面十一面・木造神像一軀（指定文化財）

天然記念物　社叢（県指定）

由　緒　奈良時代の神護景雲三年（七六九）道鏡事件に伴い和気広虫公（法均尼）は当地に配流され、弟の清麻呂の雪冤のため所持する円鏡に宇佐大神を勧請祈願する。これを以て神社創祀の年とし、次いで宝亀八年（七七七）参議藤原百川が封戸二十戸を配所に充てた時を以て社殿創建とする。一説に天応元年（七八一）の創祀とも言う。また、神護景雲元年に宇佐に八幡比売神宮寺が造られており、当宮にも早い時期に神宮寺が建立されたらしい。降って、保元三年（一一五八）左弁官宣旨に石清水八幡宮寺領として備後国御調別宮が挙げられ、元暦二年（一一八五）の源頼朝下文によって八幡宮寺領として御調別宮が安堵されており、石清水八幡宮の別宮として広大な神領を有していたことが知られ、社運の降盛が窺える。また、嘉禎二―三年（一二三六―七）開版の阿弥陀経や法華経等の版木（重要文化財）が安那定親を願主として奉納されている。南北朝時代からは足利氏の崇敬を受け、嘉吉年間（一四四一―四）には将軍義政が木造狛犬（重要文化財）を寄進。社蔵文書に大永六年（一五二六）渋川義陸が作成した「備後国御調郡八幡之大堺之事」（社領目録）があり、また当地方が毛利氏の版図となってからは天正十九年（一五九一）毛利輝元加判の「八幡社領書立」があり、当時まで社領二百三十四石余を有した事が知られる。関ヶ原の合戦後は福嶋正則が入国して社領を没収されたが、元和五年（一六一九）浅野氏入部により広島藩主並びに三原城主等歴代の祈願所として崇敬され、現今の社殿はこの時期に復旧された。神宮寺は京都御室の仁和寺の別院として存続したが、明治初年の神仏分離令により廃寺となった。明治以後は八幡神社と称し、大正九年県社に列せられた。戦後は御調八幡宮の宮号に復した。昭和四十三年御鎮座一千二百年記念大祭を斉行、合せて本殿拝殿、神門の葺替、社務所の増改築、収蔵庫の新設を行った。

特殊神事　〔八幡の火祭〕七月最終土曜日に斎行。参拝者の祈祷木を焼納する。

行　事　〔花おどり〕例祭日に奉納。県指定無形民俗文化財。

職　員　〔名誉宮司〕桑原末彦、〔宮司〕桑原国雄、〔祢宜〕桑原八千代

氏　子　六三〇戸（三原市八幡町御調郡御調町津蟹、植野、福井、久井町坂井原）

崇敬範囲　広島県内

―――　広島県神社誌より　―――

古代から中世にかけては祀り事と政は、不可分の仲に有り当時の豪族は、社寺との関わりを通じて勢力の扶植に勤めていた事が知られている。当時の在地豪族が当社と如何に関わったか推量しながら参拝するのも、探訪か。

本郷平廃寺塔心礎近影

本郷平廃寺跡

御調町大字丸門田の御調川北岸丘陵、比高差二十mに位置し、現在過っての寺域内に地域の観音堂が建てられ祀られている。

本郷平廃寺周辺からは以前から軒丸瓦・軒平瓦等の古瓦片が出土することが知られていた。本郷平の地名から古代の駅屋跡もしくは館跡との説もあったが、昭和六十年からの四ヵ年にわたる発掘調査により、白鳳期の古代寺院跡であることが判明した。

調査の結果寺域に付いては一町四方が推定でき、伽藍配置は南に塔跡、北に金堂跡の南北の伽藍配置であり、講堂跡回廊跡共に判明せず講堂は、当初から存在しなかったと思われる。回廊・築地共に存在しない古代寺院跡は中谷廃寺の例があり本郷平廃寺も回廊・築地共に存在しなかったと考える。

塔跡からは、礎石の上面より四十六cm下から塔心礎が検出された。地下式心礎であり花崗岩製の心礎の中央に経四十四cm、深さ四cmの円形堀込を施し、更にその中央部の南北軸に平行し幅八・五cm、長さ三十四cm、深さ三cmの孔が彫られていた。さらに心礎北端には舎利孔と考えられる深さ三cmの孔が彫られていたが舎利容器は出土しなかった。

出土遺物には瓦類・塼　塑像片・風鐸片・弥生土器片等の遺物が出土している。

建立の時期に付いては、出土古瓦の調査により白鳳時代の建立寺院と考えられ備南でも最も古い時代の寺院の一

つと考えられる。

照源寺近景

照源寺　木造釈迦涅槃像

九本山照源寺は、御調町諸原谷に当初開基された真宗寺院で山南の光照寺・甲田の照林坊と併せて備後の真宗三ヶ寺称されていた古刹である。

寺伝によると、寛喜元年（一二二九）に明光上人が諸原谷に建立したが、兵乱のため衰退、明応八年（一四四九）八月鎌倉最宝寺九世明心の弟仙源が再興し、永禄元年（一五五八）四世康珍のとき、雲雀城城主池上因幡守を頼って石原谷に移り、元文二年（一七三七）三月に現在地に移転したと言う。

照源寺の涅槃像は、像長一・五m、寄木造、玉眼入りで鎌倉時代に造られたもので、昭和二十四年二月十八日付けで国の重要文化財に指定されている。等身大の涅槃像は全国的に珍しいもので、奈良県の岡寺、香川県の観音寺と此処照源寺の三ヶ寺のみである。岡寺及び観音寺の涅槃像は平安時代の造像である。

「涅槃」とは私たち一般が考えている「死去」の事ではなく煩悩の火を消し去ったこと、言わば悟りの世界であり「入滅」とか「入涅槃」と言う。

釈迦如来の涅槃は、頭を北に向け、お顔を西に向け、横臥する姿勢で通常右手の手枕をしているが、右手の手枕でない涅槃像も存在する。頭を北に向けて、お顔を西向きの姿勢にすれば自然と右脇が下になる。右脇を下にして休む姿勢は、身体の左にある心臓に負担を掛けない理想の寝姿である。

記　木下和司

本照寺裏手五輪塔群近影

本照寺裏手五輪塔群

御調町市の雲雀城麓国道一八四号沿いに日蓮宗本照寺がある。本尊は法華法宝塔・釈迦多宝如来。本照寺の寺伝によると永正元年（一五〇四）日親を開基として細川正元が建立と伝う。天正十一年（一五八三）雲雀城の城主であったと伝う池上丹後守により池上氏の菩提寺と定めたが、宝永四年（一七〇七）焼失、翌年再建と伝う。また「芸藩通史」によると、文安元年（一四四四）僧日親開基、天正十三年（一五八五）池上因幡再建とある。

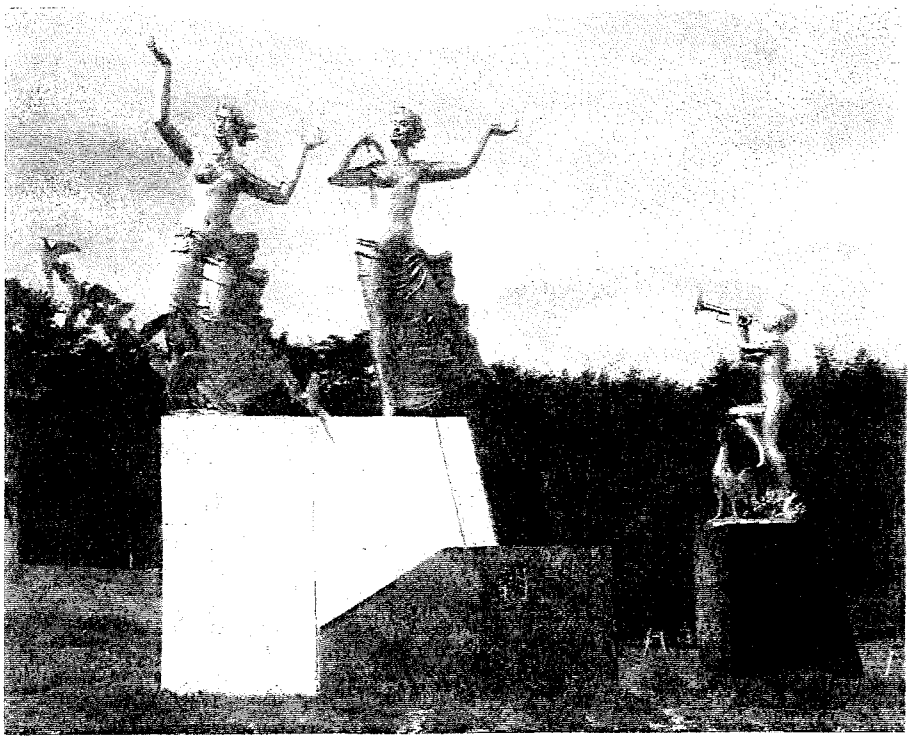
雲雀城は嘉吉年中（一四四一～三）土倉夏平が築城居城したと云う、其の後明応二年一四九三に三吉氏家臣池上丹波守が城主として入ったと伝う。

本照寺の裏手に墓所があり、墓所の一角に池上氏代々の墓石と伝わる五輪塔・宝篋印塔残欠・一石五輪塔等が二十数基祀り伝わっている。其の中に天正五年・同六年・同十四年銘の三基がある。中でも大型の五輪塔数基は、元は雲雀城二の丸に祀られていたものを移したと伝う。

墓石背後に説明版が建てられており、池上氏数代の名とともに時代が記されて池上氏歴代の墓石との説明が記されている。五輪塔の推定作製年代と合致するかは、若干の疑問を禁じえない。

池上氏に付いては、池上丹波守・同佐渡守・同少輔・同久太郎・同因幡守・周防盛光の名が各誌に記述されている。姓氏家系辞典には、「世々首藤氏に仕ふ、廿四代の孫善右衛門、氏を桑原に改む（芸藩通志）と。」記されている

注、首藤氏とは県北の豪族「山内首藤氏」の事と考える。「毛利氏八ヶ国御時代分限帳」には、「池上七右衛門・備後御調・三百二十七石九斗六升六合八勺」と記されている。



円鍔勝三１９７９年制作「朝」ブロンズ

鍔勝三記念館

円鍔勝三記念館は、御調町出身の彫刻家円鍔勝三氏の偉業を讃えるとともに、町文化の発展に寄与するために平成五年円鍔記念公園を整備開園され、その中心施設として記念館が建設開館されました。

記念館内及び記念公園には、円鍔勝三氏の作品が数多く展示されています。特に記念館周辺の公園には円鍔氏の代表的なブロンズ像六体が散歩道に、配置展示されています。

円鍔勝三は、明治三十八年御調郡河内村（現在の御調町）に生まれ十六歳で京都に上り、京都の彫刻師石割秀光の内弟子となり彫刻家を志しました。その後研鑽をつみ二十三歳で上京し、澤田政廣氏に師事して、大正末から昭和の戦前にかけて起こった木彫界の新たな運動に加り、明治以降の失われかけていた日本の木彫を、よみがえらせました。

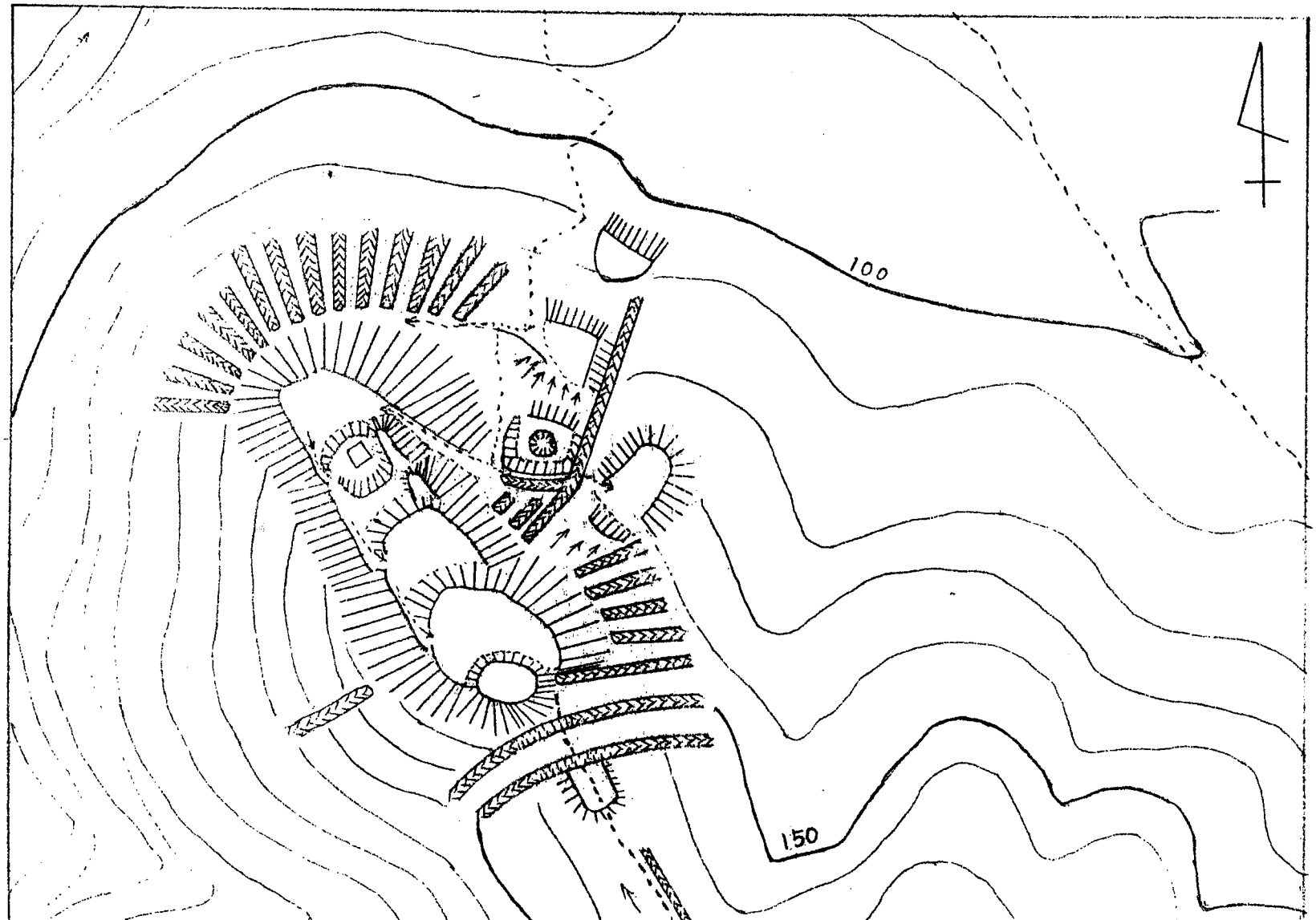
円鍔芸術の特徴は、木彫を主流としながらも様々な素材を使い作品を制作していることです。このことが、自由な表現の多様性を生み出しています。又作品は、夢とロマンに溢れ、雄渾に満ちた独特の境地を拓き、絶えず平和を希求する心と生きることへの愛着が現れています。

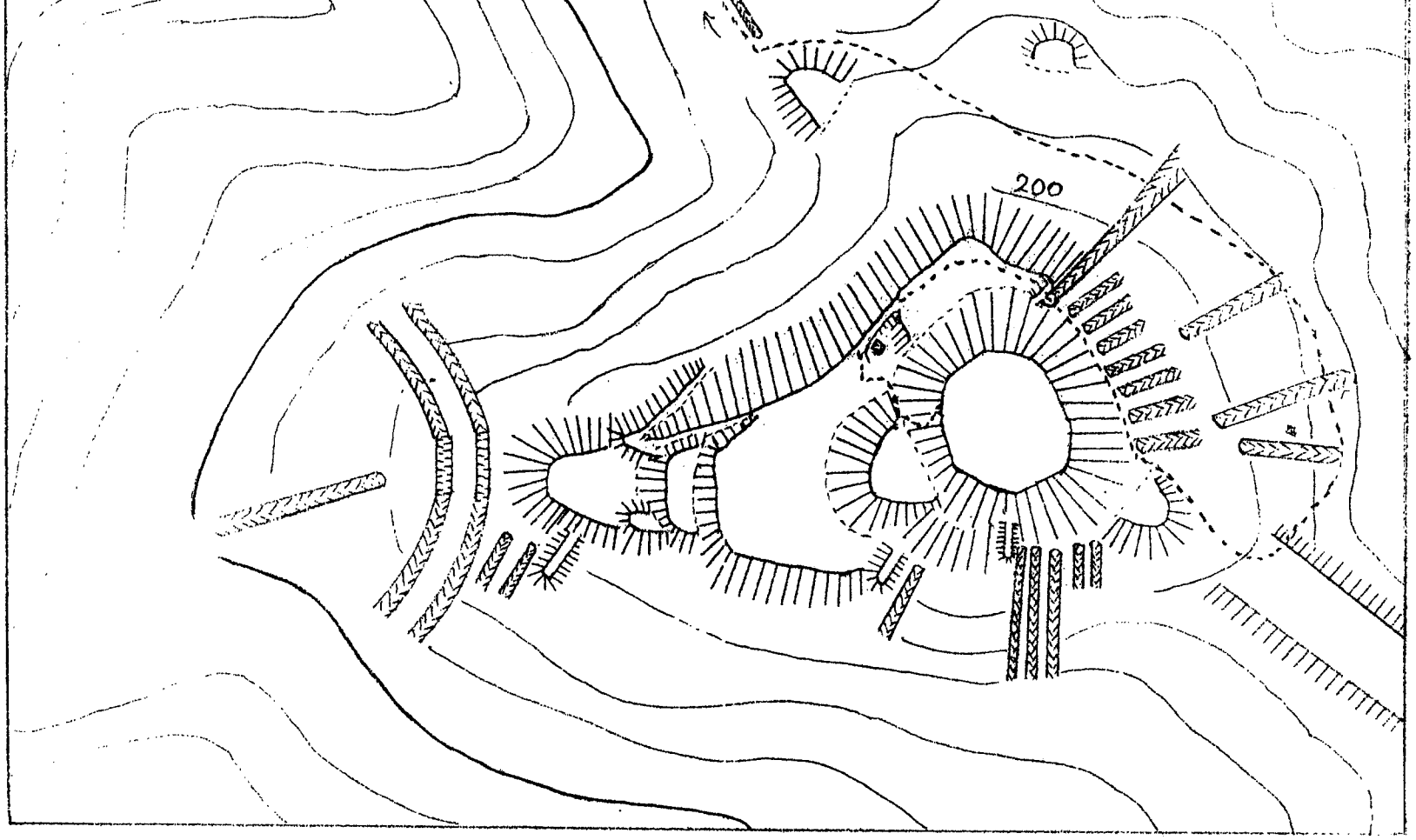
少年時代を過ごした、この御調の地での思い出が円鍔作品のバックボーンとなっているようです。豊かな自然と細やかな人情、私たちが忘れかけている感情を思い起こしてくれる、そんな世界に触れることが出来ると思います。

なお、円鍔勝三師は、平成十五年十月永眠されています。

合掌、

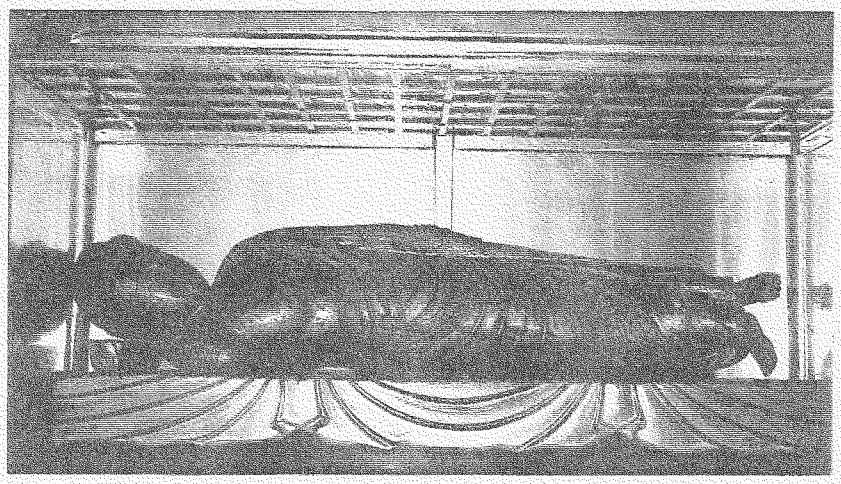
――円鍔記念館パンフより――


4
100
150



牛の城跡略測修整図（S＝1：2000）

作図　坂本



照源寺木造仏涅槃像